

どっこい生きてます!



毎年秋の公開フォーラムとともに恒例イベントとして定着した潮騒 JTC 第3回潮騒大運動会」が4月6日、初夏を思わせる汗ばむ天候の下で高松緑地運動公園を会場に開かれました。ふだんは室内での活動が多いだけに、野外で自分の体調に合わせて体を動かす運動会は適度な競争心が刺激となり、入寮者の一体感を醸成するなど施設運営の潤滑油になっています。今年もスタッフの準備と下支えでトラブルなく進行し、潮騒の持つマンパワーの潜在力をいかに発揮し、工夫を凝らしたプログラムと潮騒ならではの応援合戦、ゲストのマーシーのマイクパフォーマンスなど他にはない異色の運動会となりました(4～7ページに記事)。

2019

4

世代を超えた潮騒流 「学びへの挑戦」を 定着させたい



周知のように新元号が「令和」と決まり、5月1日には皇太子さまが新しい天皇に即位されます。ともすると閉塞感が漂うこの国に、希望の光が差し込んできた感じです。めでたい新年度のスタートにあつて、私自身も“70の手習い”の高校生活(地元の県立鹿島灘高校の定時制)が、悪戦苦闘しながらも4年目にこぎつけました。当初、夜間なら時間がつくれるだろうと高をくくっていましたが、予想を超えるスピードで潮騒ジョブトレーニングセンター(JTC)の施設規模が大きくなり、これに伴って私の多忙化にも拍車がかかっています。昼夜なく「潮騒の顔」である私の出番が多くなり、仕事と勉強の両立がとても大変な状況です。正直なところ「もうダメかな」と弱気になった場面もありましたが、潮騒の仲間たちや先生方の励ましを受けて何とか進級に必要な単位をクリアできました。今は定時制の最終学年を迎え、気を引きしめています。嬉しいことに今年度もスタッフの一人が私たちと同じ「学びの徒」となり、この高校に通い始めています(9ページに記事)。学齢期(就学年齢)という言葉がありますが、私は「学びに遅いはない。学びたいと思った時が最大のチャンス」と考えています。昼間は仲間の手助けと自分の病気(依存症)の回復に励みながら、平日の夜間には世代を超えた同級生たちと机を並べる—この流れを潮騒に定着させたいと考えています。

私たちの背中を押すように、先月号で日本ダルク代表の近藤恒夫さんが潮騒における「学びの動き」を高く評価してくれました。近藤さんは紙面で「ダルク流の大学」構想に言及し、既存の学校制度や枠組みにとらわれない新しいコミュニティーづくりに挑戦する決意を語ってくれました。アディクトの悲しい性分で、私も近藤さんも常に目標を設定して立ち向かう姿勢で共通しています。昔ならとつとに楽隠居の年齢なのでしょうが、超高齢化のこの時代には「死ぬまで現役」でいることが何事かであると思います。私も近藤さんを見習って高卒の資格を得たならば、次は通信制の大学に入り精神保健福祉士の資格取得を目指そうと考えています。昨年度、精神科クリニックが潮騒アディクションビレッジ会館内に開院してからは、その思いが一段と強くなっています。

さて、少しだけ施設運営の現況に触れます。入寮者の増加による施設の大規模化に伴い、組織の在り方や職員態勢の見直しを図りつつあります。多様な障害を持つ人たちや高齢&複合依存症者の急増に対応して、より専門的で個別的な支援の厚みが求められています。なので、NPO法人・潮騒JTCを構成する各部局・関連施設とのネットワークを強化しつつ、それぞれの役割を明確化しました。事務作業も膨大となり、これをスムーズにこなすには会社で言うなら総務機能の充実が不可欠となり、的確な経営企画や財務管理が急務です。その場しのぎの施設運営では行き詰まってしまう。一歩先を見通した経営戦略を練る必要があります。もちろん潮騒の主役は入寮者です。これまで通り当事者活動の意義と原則を生かしながら、力量ある職員の配置によって入寮者を下支えし、回復に向けてみんなの力(マンパワー)を結集していきます。(センター長 栗原 豊)



東京家族会総会に栗原センター長らが出席 幅広い質問に答えて会員と交流を深める

薬物依存症者の家族が集まる「東京家族会」(片山享子会長)の総会が4月8日、東京都足立区の全国薬物依存症者家族会連合会(通称・薬家連=やっかれん)事務所で開かれ、潮騒JTCの栗原豊センター長がゲストとして招かれ、同家族会の会員たちと活発に意見交換が行われました。栗原センター長が全国にある依存症の家族会に出席するのは初めてのことです。この日は女性ハウス「るみの家」施設長のルミさんや女性メンバーも同行しました。

総会で発言を求められた栗原センター長は、「一番うれしいのは、私自身が新しい生き方ができるということ」として、薬物やアルコールと縁を切った生き方を説きました。その一方で「いまだに夜見る夢は(自分が)クスリを使っている夢」などと本音を打ち明け、依存症の治療と回復が生涯治療として息の長い取り組みであることを踏まえ、日々薬物やアルコールへの欲求と闘い続けている実情を明かしました。

参加者から潮騒JTCの特徴についての質問が寄せられると、栗原センター長は「最初は『仕事を与えれば何とかなる』と思ったが、金銭管理ができていない人が(お金を)持つとどうにもならない。そこで秋元病院(千葉県鎌ヶ谷市)から来た人が『ミーティングをやりましょう』ということで始めた」など回復プログラムに着手したきっかけや、試行錯誤を重ねながら施設が成長してきた歩みを振り返り、栗原センター長自身が70代半ばの今もさまざまな活動に挑んでいることを力説しました。ほかにも栗原センター長が拘置所にいる薬物事犯の容疑者・被告人に手紙を出していることへの質問がありました。栗原セン

ター長は「考えに考えて、どうしたらこういう人たち(薬物依存症者)に巡り合えるかを考えた」と述べ、あれこれ知恵を働かせて未知の仲間とのコミュニケーションを取る方法を模索してきたことを明かしました。それでも「手紙は100通出しても、返事は1、2通ほど。でも私たちには自分自身の回復につながる大事なメッセージ活動だと考えて諦めなかった。7～8年経ったが、今も続けている」との説明に、参加者の皆さんが熱心に聞き入っていました。

潮騒JTCが展開する農業や介護などの事業にも会員の関心が高く、栗原センター長は「何でも『自分の力でやっちゃえ』といってやっている。(仲間向けの)お墓も用意した」と語りました。このほかダルク建設反対運動への対応について質問が及ぶと、栗原センター長は「ていねいに説明会をする。無理をしない」と述べ、実績を作っていくことで「得体の知れない施設」という地域住民の偏見を解いていくことの重要性を訴えました。

栗原センター長は「日本社会も変わってきた。最初の頃は(裁判所で)検事から『何人の回復者がいますか?』となったが、今では裁判官も(ダルクを)認めてきている。情状証人として(法廷に)出るけど、変わってきている」と、司法の場でもダルクや潮騒JTCが認められつつある現状を語りました。一方で、コカイン使用の疑いで逮捕された歌手・俳優のピエール瀧さんのテレビ報道の在り方について、会員の間からは「(ピエールさんの)保釈金はいくら、って何で言うのだろう。保釈金がいくらかってどうでもいい」と、興味本位な報道について苦言がありました。(サッキー)

第3回 潮騒大運動会



潮騒 JTC 恒例の「第3回潮騒大運動会」が4月6日、好天に恵まれた鹿嶋市光2の高松緑地運動公園で開かれ、各競技で得点を重ねた紅組が白組の90点を超える200点を挙げ、昨年の雪辱を果たして優勝しました。

同運動会には、同センターに所属している男女それぞれの入寮者や職員のほか、関連施設の高齢者介護サービス「百寿」や潮騒食堂「おらげのかまど」、施設内医療機関「はまなすクリニック」、潮騒家族会、招待された支援者ら延べ約300人が参加し、大会は大いに盛り上がりました。今年も担当スタッフや職員らが工夫を凝らした競技プログラムや応援、会場の準備などに奔走。童心に帰った入寮者ら競技参加者が、紅白の2チームに分かれて熱戦を繰り広げました。

競技が行われたのは、桜が満開に咲いた同公園野球場。広い外野の芝生には、白いビニール製の縄やポールなどを利用した臨時のトラックが設けられ、紅白両組のシート席のほか、本部席と「百寿」、女性ハウス「るみの家」、救護班には専用のテントが準備され、笑顔の入寮者たちが次々と会場に入りました。

午前10時、全員が本部前に整列し、一郎さんによる開会の言葉で大会がスタート。栗原豊センター長が「私たちは『今日一日』という生き方をしていますが、今日はこれを『スポーツを楽しむぞ』『運動会を楽しむぞ』に変えて過ごしてもほしい」とあいさつし、大会委員長の安野勇

はまなすクリニック院長が「体を動かして頭を使うと脳のボルテージが上がり、健全な充実した幸せ感を味わうことが出来ます。今日を有意義に過ごして下さい」と激励。昨年優勝した白組代表のツカさんからセンター長に優勝旗が返還されました。選手を代表して女性ハウスのミッチャンが「私たちアディクト一同は、日ごろのプログラムの成果を発揮し、これまで支えてくれた家族・仲間、施設の期待に応えるため、正々堂々と競技を行い、全力を尽くすことを誓います」と元気に選手宣誓。大きな拍手が送られました。

全員がラジオ体操で身体をほぐした後、「百寿」の人たちも参加してボール渡しの速さを競う「玉返し」でプログラムがスタートしました。続く「綱引き」では、男女混合と女性陣だけによる力比べが行われ、紅白ともに声を合わせて綱を引き合い、チームの結束力を競い合いました。休憩を挟んで行われたリレー形式の二人三脚では、入寮者や家族、夫婦が仲良く互いの足首を縛りあってバトンをリレー。応援席から「ガンバレ」などと大きな声援が送られました。

お昼の休憩を挟み、実況を担当してきたヒトシさんとメイさんに元タレントの田代まさし氏（マーシー）がゲストで東京から駆け付けて加わり、ギャグを交えた楽しい司会が進行しました。応援合戦では、女性陣の応援に混じって紅組の男性3人が女装で登場。応援ダンスで仲

間たちを鼓舞しました。白組からは黒い服装で統一した男性7人が登場し、三三七拍子の力強い声援を披露して運動会の雰囲気を盛り上げました。

午後最初のプログラムは、入寮者(男女)や職員、家族会、支援者が参加する玉入れでスタート。伴走者を探す借り者障害物競争では、手を使わずに小麦粉入りのトレーの中から飴玉を捜してくわえる走者の白粉顔が笑いを誘い、酢や辛い液の入ったかき氷でむせ苦しむ姿に大爆笑の渦が広がりました。ケンケンやスキップなどで走るリレーの後は、最終プログラムの紅白対抗リレー。選抜された足に自慢の走者が真剣勝負の熱い戦いを繰り広げ、応援の歓声も最高潮になりました。最終得点は白組90点で、紅組がダブルスコアを超える200点を獲得。閉会式では大差で勝利を納めた紅組リーダーのルミさんにセンター長から優勝旗が手渡されました。センター長が「長丁場に渡って大変ご苦勞様でした」と参加者全員の労をねぎらい、大会を締め括りました。(岩)

イサ 潮騒の看板・エイサー演舞があるとよかった

昨年は入寮して1カ月もたたない中で、初めての運動会だった。2回目の今年は、前回よりも全体的に内容が向上しており、競技自体もバラエティーに富んでいた。次の競技種目に移る流れも昨年よりもスムーズだったし、応援合戦もよかった。欲を言えば、昼の休憩には女性ハウスメンバーのエイサーの踊り(パーランク)が組み込まれたが、できれば潮騒の看板でもある(正式メンバーによる)エイサー演舞があってもよかったのでは?でも、運動会としてはまとまりがあり、みんなが紅組・白組のどちらかに組分けされて、適度に対抗意識があって、これが盛り上がりを支えていたように思う。

僕は大学時代に学生主催の本格的な運動会をトップリーダーとして仕切った経験がある。潮騒の運動会はそのミニ版なのでどこか懐かしい部分もあった。僕は音響と写真撮影を担当したが、場所が広く音響関係はマイクが聞き取れなかったのが、来年の反省点とした。潮騒の運動会は対外的にも開かれており、外部からの参加者も多くなっているのが、運営面ではますます大変になるだろう。戸外での活動は開放感があっているのだけれど、野放図になるとトラブルにつながるの、その辺のさじ加減が難しい。あくまで潮騒の運動会には主役は入寮者だから、みんなが童心に帰って楽しんでいる様子を見ると、弾けるところでは思い切り弾けるのが大事だと思う。

ブッチー 転びながらも前向きに頑張っていこう

施設の運動会は初めての経験だった。障害物リレーとガチのリレーに出たけど、とても緊張した。自分は足が遅いので、走ることが苦手だった。昔トラウマがあって、走っていて転ぶことがとても恐怖だった。だから障害物リレーに出るよう急に指名されて内心ドキドキだったけど、ツカさんから「いいから気にしないで走っちゃえ」と背中を押されて、しかもデイケアでは気心が知れているアオさんと一緒に障害物リレーを走ることができ、とてもいい経験になった。結局リレーでは転んでしまったけど、人生は学びの場だから自分にとっては転びながらも前向きに頑張っていこう—そんな教訓を得たような運動会だった。

スタッフとしての反省点は、ナイト施設でみている人たちの中には、なかなか自分の言うことを聞いてくれない人もいて、少し苦勞した場面もあった。でも、ナイトのみんなは楽しんでくれていた。前日の準備も大変だったけど、プログラムの進行でもう少し流れをスムーズにしたかった。結果的には十分に合格点がもらえると思う。当日は天気も良かったし、会場が野球場だったのも良かった。昔、自分は野球をやっていたので何となく懐かしさがあり、野球意外でもこんな形で楽しめるんだと改めて勉強になった。

キム 赤・白それぞれの人数合わせに苦勞した

覚醒剤使って捕まって、職を失って潮騒につながった。こうした施設に入ったのも運動会も初めての体験だった。当日は白組に入りガチリレーだけに出場したが、正直きつかった。体を動かすのはどちらかということ苦手な方で、それに人前に出るのも好きじゃない。だから壇上に上がって、みんなの前で準備体操をリードする大役を与えられて正直、ドキドキだった。できればやりたくないというのが本音だったけど、みんなサボらずにやってくれたので、まあ気持ちよかったね。

全体的な印象としては、あれだけの大人数にしては比較的まとまりがあった。中には白組なのに赤組の中にいたり、逆に赤組なのに白組のグループにいたり、はみだし組も数人いたけど…。大変だったのは、各種目に出場するメンバーの人数を合わせる事。事前に出るメンバーは決まっていたはずなのに、当日になって出なかったり赤・白それぞれの人数合わせに苦勞した。できるだけ力を均等にと考えるが、正直その線引きは難しい。本番では準備の段階で想定していないことが起きるも

のだが、それでもなんとかするのが潮騒流。それも含め自分には思い出に残るいい運動会だった。

タフヤ 役割分担で細かなコミュニケーションが必要に

現在スタッフ研修中で、ふだんから裏方の仕事に追われている中で、潮騒の運動会は2回目の参加だった。去年は白浜少年自然の家芝生広場が会場だったので規模が小さいイメージがあり、リレーをするには狭いのが課題だった。今年は施設から距離も近く、しかも運動公園内の野球場だったので、広くて開放感があり気分よく走れた。紅組の選手として主にガチリレーに出場したが、気分そう快で走り甲斐もあった。与えられた役割では弁当係を担当した。配布の流れで多少の混乱はあったけど、みんなの手に弁当が届けられたので、まあまあスムーズにいったと思う。役割分担ではもっと細かなコミュニケーションが必要かもしれない。

昨年よりも高齢者が増えているので、企画や準備段階からスタッフの仕事や苦労は多くなっているのは確かだ。実際、ふだんから介護が必要な高齢入寮者の人たちへの対応も大変なので、これだけ大規模な運動会ではトラブルなく対応できるかと個人的には心配していたが、それは杞憂だった。自分と同じナイト施設には体の不自由な人が多くなっているだけに不安もあったが、結果的には70歳を超える仲間も楽しく参加してくれていたのが良かった。

イチ 円滑な運営に向け運動会だけのコミティを

デイケアの仲間たちは1年のうちに外で活動するプログラム場面は限られているので、フォーラムとともに運動会はみんなが楽しみにしている潮騒のビッグイベントだと思う。それだけに、当日は天候にも恵まれて、会場も広々とした野球のグラウンドだけに、いい空気が吸えた。それに外で食べる弁当はおいしかった。自分は競技にはほとんど参加していなかったけれど、見ていただけでみんなの顔がすがすがしく見えた。こうしたことは、ふだんの室内生活では得られない貴重な体験になった。とにかく潮騒の運動会は、応援や見るだけの参加でも意義があると実感した。

本音を言えば、自分は団体行動が苦手な個人プレーが好き。でも、運動会のような施設の大イベントを成功させるには、みんなの統率と協力が不可欠で下支えするスタッフの力量が試される。自分にとっては4回目の潮騒運動会だったが、昼食の弁当配布の仕方と流れを混乱なくすることなど、いくつかの反省点がある。これ

までと比べて会場が分かりやすくなったのに、駐車場から野球場が遠く、招待した来賓の方には申し訳なく感じた。トイレも少なく洋式にいたってはゼロ。来年はそうした細かい点にも配慮を加えたい。それに運営をスムーズにするためにも運動会だけのコミティが必要だと思った。



るみの家 感想文

レモン エイサーに沖縄の空気を感じ思わず泣きそうに

私は「るみの家」に来て10日ほどの新入り、最初の行事が大運動会でした。盛りだくさんの内容でビックリというのが第一の感想です。もう少し小ぢんまりしているのかなと思っていましたが、施設も人数も予想よりも規模が大きくて、みんなで盛り上げているのが分かり、楽しみながら参加しているように感じました。

私の種目は障害物競走でしたが、自分の出番が近づくときドキドキしていました。人前で何かをするというのは、私は苦手な、緊張しいので、いつもドキドキしてしまいます。初めての参加でしたが、楽しい一日でした。昼間、太陽の下でそれぞれの思いの中、みんなと一緒に楽しみ、みんなと一緒に片づけたり、手作りの運動会という感じで嬉しかったです。

エイサーの話も少しだけ。沖縄出身の私はエイサーには馴染みがありますが、踊ることは一度もなかった。沖縄の空気を感じずにはいられませんでした。誰一人沖縄出身者がいない中で、よくここまで仕上げ、本当によく練習したなと思いました。一人の沖縄人として心から嬉しく思いました。指笛もあり、これぞ「ザ・沖縄！」、一段と沖縄らしさが出ていました。思わず泣きそうになりましたが、何とか泣かずに済みました。

初めての茨城での生活、遠く離れた地で、本土の人だけがやるエイサーを見られるとは思っていませんでした。サビついてしまった自分のどこかをノックしてくれているような感覚にもなりました。楽しい一日をあり

がとうございました。盛り上げ上手な人にも感謝しています。たくさん笑わせて頂きました。

PS. エイサーの時に歌っている人がいましたが、聞きはれてしまいました。なるほど、人は何かしらいいところを持っているんだと思わせて頂きました。

あきら 一緒に走った子供の成長ぶりと足の速さにビックリ

私は18年ぶりに再会できた息子との初めての運動会でした。そこには何気なく子供を目で追っている私がいきました。私は白組、子供も白組でした。嬉しそうにしている子供を見て、私も頑張ろうと思いました。競技が始まり、最初に大玉回し。最初は白組が勝っていたので、私も白組チーム、ボンボンをもらうため歌を歌いながら応援をしました。

次に綱引き。でも、「紅組強し!」です。負けてしまいました。二人三脚では子供と出ることになりビックリ。初めて子供と腕を組み、大きくなった、成長した子供にさらにビックリ。まあ、なんとか走れたかな?(笑)。それで弁当タイム。みんな(仲間たち)と食べるお弁当はとてもおいしかった。昼休みに応援合戦が始まり、私は白組でしたが、紅組に入って踊り、練習のきいもあり、うまく踊れました。去年も踊りでしたが、その時も感動したけれど、やっぱり今年も感動しました。

最後にリレー。私は去年もリレーに出ましたが、私は自分の中では一番のイベントだと思い、仲間と走りましたが、仲間も精いっぱい走りました。なんと私の子供もリレーに選ばれていて、それがものすごく足が早くて、これまたビックリ。その姿を見て、ただただ感動しかなかったです。

これから私の埋め合わせが始まると思っています。自分にもよいプログラム、そして、回復、今日という日、来年も子供とリレーが走れるよう、私は子供と、そして仲間たちと、「るみの家」で生き続けたいと思いました。

めい 「いつか私も息子と走りたい」 と思った潮騒運動会

私は3度目の参加だった潮騒大運動会。今年も司会という大役をいただき、朝からバタバタでした。両親も遠いのに来てくれました。母は体調が少し悪そうで、最後までいられないかもと言っていたのですが、結果、最後まで父と一緒に見てくれました。司会をしている私を笑顔で見てくれた父。あまり話す方ではないけれど、私を見てうなづいていました。母は家族会の方に「この子が、こんなにたくさんの人の前で堂々と話せる度胸があるとは思っていなかった。これも才能だね」と言ってく

れました。素直にうれしかったです。

父と走った二人三脚は、去年同様、決して早くはないけれど、息ぴったりで満点でした。去年より少し小さくなった父、私のために一生懸命走ってくれました。「親子っていいな」と思いながら走りました。父の手は小さい頃と変わらず、温かったです。

午後の見どころの一つ、障害物競走では、女性の仲間が借り物ゾーンで「脱走したことがある人」のカードを引き、思わず私は思いきり手を挙げてしまい、仲間の手を引っ張り、走りました。そして、なぜか小麦粉ゾーンで頭を勢いよく押され、顔が真っ白に。歯ぐきから出血しながらなんとかゴール。父と母は苦笑いをしていました。

その後、仲間の息子さんがまた「脱走したことがある人」のカードを引き、顔を背けたのに指名されてしまい、へ口へ口のまま2周目を走りました。自分の息子と同じくらいの子に手を引かれ、「自分の息子もこんなに早いのかとかな」とか考えながら走りました。女性陣の前を通った時「めい、遅いよー」の声。心の中で苦笑いの私でした。

今年の運動会は見所がたくさんあり、応援合戦もそれぞれの色があり、素晴らしかったです。結果、今年は紅組が勝ちました。ものすごく疲れたけれど、本当に楽しかったです。いつか私も息子と走りたい。そして、また来年、父とまた二人三脚できるのが楽しみです。父と母の笑顔を見ると、よかったと思える私がいいます。今まで散々泣かせてきた分、これから親孝行していきたいと強く思いました。

ミニ 健康になると親に対する気持ちや行動も変わる

施設に来て2度目の運動会。今年は両親も参加してくれ、父親と二人三脚に出て、楽しかったです。そのあと、女性メンバーの綱引き。紅組が2回とも勝ちました。(私は紅組です)。障害物競走に私は出ましたが、負けてしまいました。ふだん使っていない体力を運動会で無理したので、筋肉痛です。紅組の応援合戦も楽しく、とても良かったです。そのかいあってか、リレーを2回やって、最終的に紅組が優勝できたのでうれしいです。

父親がエイサー好きな人で、昼休みに女性メンバーがパーランクでのエイサーでしたが、両親のために踊ってくれました。両親もエイサーも運動会も喜んでいました。その後に面会ができたので、夕食を一緒に食べていろんな話をしました。クスリを使っていた頃は、こんなに父親とも仲良くできなかったのに、健康になると親に対する気持ちや行動も変わるんだと思います。楽しい一日をありがとうございました。

古道を歩き歴史と自然の恵みを肌で感じる

鹿嶋神の道

栗原センター長らが「鹿嶋神の道」のコースを実体験



前号の随想(巻頭言)でも触れていますが、地元・鹿嶋のまちおこしで注目されている「鹿嶋神の道」事業にボランティア協力しようと栗原センター長らが3月16日、この事業に取り組む「鹿嶋神の道運営委員会」メンバーの道案内で「神の道」を歩き、実際にコースの魅力を体験しました。当日は桜の開花前であいにく小雨が降る天候でしたが、潮騒JTCからは原田事務長、農業隊リーダーのヒトシさんも加わり、総勢10人が主要ポイントを盛り込んだ10数キロの三社(鹿島・坂戸・沼尾)参りの古道コースを歩き抜きました。

この日は、コース内のサクラを楽しみながら参加者が歩く「第5回桜ウォーク」(4月6日に実施)の下見を兼ねたもので、一行は午前9時にト伝にぎわい広場(鹿島神宮前通り)をスタート。鹿島神宮を参拝して奥参道を経由して御手洗から清真学園前を通り、古道入り口に。ここから坂戸神社、沼尾神社、市霊園前、鹿島学園わきの市道を北浦方面に下り豊里公民館で昼休憩しました。みんなで潮騒食堂「おらげのかまど」から届けられたお弁当を食べ、午後は同公民館から夫婦塚古墳、稲荷塚古墳、天狗党の墓を巡って城山公園(鹿島城址)に至り、午後2時過ぎには出発地点に戻り解散しました。

途中、市街地を抜けて古道に入ると、平地林や畑を抜

ける道だけでなく狭く起伏に富む獣道を思わせるコースが出現。一部には朽ちた倒木が道を妨げ、目の前にツタが垂れ下がり小枝が伸びてコースを歩きにくくしているなど、潮騒の持つマンパワーの出番を感じさせました。一方で、懐かしさを伴う谷津田の景観や神々しい鎮守の杜が続き、新たな魅力発見となりました。コース内の要所には案内標識が立って整備されてはいるものの、やはり人の手が入る必要があるようです。

運営委員会代表の西岡邦彦さんは「潮騒の協力はウエルカム。これまでもNPO団体の協力で初夏と秋口には草取りや小枝払いをしている。この事業もスタートして6年目、年間約600人が参加するまでに成長しているだけに、潮騒ジョブのみなさんが助っ人となってくれることに期待したい」と話してくれました。

一方、この日のコースをほぼ歩き抜いた栗原センター長は「実際に歩いてみて、自然の奥深さと歴史の重みを実感できた。まさに神の道のネーミングがふさわしいコースで、私たちも自然神や自然治癒に通じるスピリチュアルな回復を目指しており、古道を歩くプログラムにも取り組める」と評価。ヒトシさんは「潮騒の作業車が古道のどこまで入れるかなど課題もあるが、これまで農業隊や作業隊が培ってきたマンパワーやノウハウが生かせると思う」と前向きな姿勢を見せていました。(潮)



孤立を防ぐ仲間との絆を得て4度目の高校生活に挑戦

栗原センター長の背中に教えられ奮起する一郎さん(写真後列右から2人目)

栗原センター長をはじめ先行く潮騒 JTC の先輩仲間たちに刺激を受け、地元の県立鹿島灘高校の定時制に新たに入学した入寮者の一郎さんが、以下のように就学に当たっての思いと決意を書いてくれました。

◇ ◇ ◇

この社会にはこれまで、私を受け入れてくれる居場所ではなかった。でも、そんな私を潮騒JTCは受け入れてくれた。栗原センター長は「同じ依存症という厄介な病気に苦しむ仲間なのだから、みんなと一緒に潮騒で回復の道を歩もう」と門戸を開いてくれた。苦労の末に私は潮騒という居場所を見つけた。そこで次は、この回復の歩みのチャンスを着実に継続していく努力が必要と考えた。

そんな折、先の潮騒人間塾で、ダルクをつくった近藤恒夫さんが「私は36年ダルクをやってきて、薬物依存よりも背後にある“孤立”の方が問題だと、やっと気づいた。ダルクや潮騒は孤立しないように仲間づくりをする居場所なんだ」と講話した。まさに目から鱗が落ちる心境だった。そう、私は長い間孤立状態だったのだ。本当の仲間がいなかったのだ。

薬物を一時的にやめることはできるだろうが、完全に治療することはできない。より身体ダメージの少ない物質への依存の代替なら可能だろうと、タバコをやめてみよう、私も刑務所の中で考えてみたことがあった。何かを犠牲にしないと、自分は甘えてしまうからだ。せっかく

潮騒が私を受け入れ、回復を目指す仲間ができたのだから、次は試練に向けたハードルを設定しようと、あれこれ考えた。すると、目の前によい手本があった。76歳の栗原センター長が、多忙な日常にあって夜間に地元の高校に通い、勉学に励んでいるではないか。

しかも栗原センター長は16年間、重い薬物・アルコール依存症にもかかわらず一貫してクリーンを保ち続けている。入寮者仲間と共にプログラムも実践し、時間がある限りミーティングにも加わっている。その姿を追いかけてみたい。センター長の背中についていけば、いつか社会で受け入れてくれるのではないかな…。そのためにも自分の無力を認めなくては行けない。

それは頭では分かっていることだ。けれど、ついつい悪い自我が出てしまう。自分勝手に行動したい衝動に駆られてしまう。これではいけない。自分を一度リセットし、過去の生き方を切り替えるのだ。そう思い至ると、自然と生き方が楽になった。すると自分の内面に、なんと不思議な前向きな気持ちが芽生え、「4 回目の高校生に挑戦したい!」と素直に言える自分を見いだしていた。

アディクトだから先のことは考えまい。今日一日を精いっぱい生きていけば未来は変わる。そのことを栗原センター長の背中が教えてくれた。夜間の勉強は苦労もあるが、学校生活をエンジョイしながら今度こそ卒業を目指して仲間と共に勉学に励みます。



第4回 12ステップ理解へのアプローチ

依存症と脳のメカニズム

— 前回はアルコールクの人に見える「渴望」「禁断(離脱)症状」「強迫観念」について説明してもらいました。飲酒をすると悲惨な結末に陥ると分かっているながら欲求を抑えきれず、アルコールに手をだしてしまうのが「強迫観念」でした。もう少し説明してくれますか？

依存症を理解するには、人間をコントロールしている脳のメカニズムを知ると、より理解が深まります。

— 我々の生命を維持し、思考や記憶、行動などをつかさどる脳の働きの話ですね。

そうです。考える、感じる、動かすなどの働きを生み出し、感情や情緒、理性などの精神活動にも重要な役割を果たしています。脳は身体の司令塔で、言葉や思考、信念、記憶、行動、気分など、あらゆる活動に関与しています。

— 脳の構造はどうなっているのでしょうか。

脳は大きく分けると大脳、小脳、脳幹から成り立っています。さらに大脳は前頭葉、頭頂葉、後頭葉、その左右の側面にある側頭葉の四つの部位で構成されています。脳内には約1000億個以上あると言われているニューロンと呼ばれる脳を構成する神経細胞が張り巡らされていて、電気信号によって情報の処理や伝達が行われます。ニューロンは中心に核を持った細胞体で、細胞体から延びた1本の神経線維の軸索と枝状に突き出た数本の樹状突起で形成され、隣り合う他のニューロンとは、信号を出す軸索と信号を受け取る樹状突起はシナプスと呼ばれるわずかな間隔で結合されています。電気信号がニューロンに伝わると、軸索のシナプスから興奮または抑制の作用を引き起こす神経伝達物質の化学物質が放出され、結合する樹状突起のシナプスに情報が渡ります。

— 脳は複雑ですが、面白くて興味深いですね。

シナプスが放出する神経伝達物質の種類によって交感神経や副交感神経、運動神経などが働き、身体がコントロールされます。神経伝達物質の中には、意欲や運動、快楽に関係するドーパミンという化学物質があり、「気持ちいい」「心地良い」「楽しい」「面白い」などの快感や高

揚感、満足感などを伴う行為によっても放出されます。

— ドーパミンのほかにアドレナリンもよく聞きます。

アドレナリンはドーパミンから生成されるホルモンで、主に副腎から血液中に分泌され、交感神経を刺激して緊張や興奮などを引き起こします。アドレナリンが分泌されると身体は緊張状態になり、喉の渇きや心臓のドキドキ、血圧が高くなるなどの症状が現れ、精神的には気分が高揚するほか、不安やイライラを覚える場合もあります。

— 依存症との関係を具体的に教えて下さい。

脳内には脳を興奮させ、快感を生み出すための快感回路と呼ばれるドーパミンを出すシナプスを持った神経細胞の集まった領域があり、快感回路が刺激されると多量のドーパミンが放出されることが分かっています。人が意欲を持って行動した際にはドーパミンが放出され、その行為によって快感や高揚感、満足感を覚えると同じ行為を繰り返すようになります。それが習慣化するとドーパミンを出すシナプスに変化が起こります。

— 依存の原因になる脳の変化ですね？

薬物やアルコールなどの依存物質やギャンブル、ゲームなどの依存行為によって多量のドーパミンが放出されると、脳は不自然な刺激の繰り返しの状態に対処するためにシナプスの構造を変化させてしまい、適量のドーパミンが出せなくなります。一方、麻酔作用や幻覚作用によって脳を麻痺させるシンナーなどの有機溶剤やケシを原料とするアヘン、アルコールも脳の構造を変化させます。これらの依存物質は、脳の中核に直接作用して副交感神経を刺激し、鎮痛作用をもたらします。医療に使われる睡眠薬やケシを精製して作られるモルヒネ、ヘロインなども同じです。繰り返し使われると脳が変化して堪えがたい欲求が起こり、これらを追い求めて依存行為にのめり込んでしまうのです。一度脳が変化してしまうと、コントロールできなくなる原因になります。

— 依存症の本質である強迫観念に対応するにはどうしたらいいのでしょうか。

依存症は、脳の一部の構造が変わってしまったことに起因する精神疾患の病気です。依存薬物や習慣化した行動によって変わってしまった脳は元には戻りません。しかし、集団精神療法や認知行動療法を導入して12ステップに取り組むと強迫観念に対応ができるようになり、回復を目指すことができます。

— 今回は12ステップの話の少し離れて依存症と深い関わりのある脳の働きについて説明してもらいました。次回は話を元に戻してステップ2から解説をお願いします。

(解説=藤田良・潮騒 JTC生活支援員、次号に続く)

受刑者 からの手紙

しつこいようですが、依存症は繰り返すことが本質の、厄介な病気です。これが引き金で起こる犯罪で服役し、罪を償って再び潮騒に登場する仲間は「神様に近い」存在です。彼らこそ、過去が一番ひどかった状況を入寮者に生きた素材としてリアルに感じさせる貴重な存在だからです。さあ、一緒に回復の道を歩みましょう！

シゲさんのつながりを大切にしたいと強く思う

今日は2月下旬の日曜日です。独房で手紙を書いています。なぜ独房かと申しますと、朝一番に雑居で同囚ともめ事になってしまい、私が部屋から出ていきました。誠に悔しく、悲しいことであります。おそらく、居座ることになると思いますが、これを機に二度と調査等にならぬようにめげずに前向きに頑張ります。

話が変わりますが、潮騒での身元引受人が先日許可されたと告知がありました。私を引き受けて頂きまして、ありがとうございます。心から感謝しております。栗原さん、シゲさんのつながりを大切にしたいと強く思います。潮騒に行きましたら、入寮者の皆さんに一日も早くメンバーと認めて頂くためにも、焦らず、強く生きていきたいと思っています。いつか心から笑顔が満ちあふれるように、潮騒の皆さんと歩みを進めて行きたいです。とりあえず、お礼と感謝の気持ちをお伝えしたく筆を執りました。

(愛知県 M・N)

ここまでこれたのも 温かいお便りがあったから

栗原さん、シゲさん、お元気ですか。私は毎日元気で頑張っています。出所まであとわずかとなりました。いよいよ出所です。私が当刑務所に来て約1年8カ月、毎月シゲさんからのお便りを楽しみに生活してきました。今回の手紙が最後となります。忙しい中、手紙を送ってくれたり、潮騒通信を送ってくれたり、今まで本当にありがとうございました。懲罰もありましたが、何とかここまでこれたのも、シゲさんからの温かいお便りがあったからです。

出所して、すぐに潮騒に行きたいのですが、残念ながら旅費がなく、すぐに行くことはできません。刑務所側も多少の旅費は出してくれると思いますが、それでも多分足りないと思います。そのため、一応保護カードの発行をお願いしました。出所日が土曜で観察所、役所等が開いていないのでどうなるか…、とりあえず出所したら一度お電話をします。その後の事は自分の事ですから、自分で何とかします。一日でも早く栗原さん、シゲさんと会えるように、出所後も頑張っていこうと思っています。今まで本当にありがとうございました。

(秋田県 M・K)

子供もおり父親としても立場を果たして行かないと…

何度も何度もクスリで失敗をして、今回に至っております。それだけに簡単にやめられるものではないという事は体験してきております。両親も高齢なのに迷惑ばかりかけ、本当に人間として最低で終わってしまいます。何一つ親孝行をしておらず、「ここで本当に生まれ変わらなければ…」「人生最後の追い込みをかけないと…」と思っております。自分に本当に甘えすぎてきました。子供もおりますし、父親としても立場を果たして行かないと情けないです。シゲさんを見習い、断薬を継続していけるように頑張ります。シゲさん、本当にありがとうございます。潮騒通信が読みたいので余っているものがありましたら、お願い致します。(北海道 I・M)

しおさい俳壇

4 月のお題 ひな祭り

選者 桐本石見

人生は 60 歳からでもやり直せる！ No.63 センター長 栗原 豊

仲間のために自分を「犠牲」できる喜びを感じる

「キリスト者でもないオレが愛を語るなんて、昔のヤクザ仲間が聞いたら“兄弟、頭がおかしくなったのか？”と驚くだろうなあ…。」そんな思いを抱きながらも、私は真剣だった。日々 12 ステップと格闘しながら、「無償の愛」に向かって行けば自分の意識を正していける、との確信は着実に深まっていった。たとえ自分の過去にあった意志を使ってしまったとしても、常に「無償の愛」に照らし合わせていければ、ほかのことはどうでもよくなる。そうすれば、すべてが満たされる。薬物など必要なく生きていけるのだ、と。それを裏付けるように、ダルクにつながってからというもの、私はクスリを使っていない。自力で生み出した考えながら、「無償の愛」の存在を自ら示し続けている感じだった。

鹿島ダルクに入寮して半年後、私はスタッフとしての日々の活動が高く評価され、施設長に次ぐ「寮長」としての役割を任せられ、責任あるポジションで多忙な日々を送ることになった。役所に出向き入寮者の生活保護の手続き、維持費の管理、仲間への処方薬提供、日々の生活のアドバイスなど相談員的な役割も務めた。何事についても新しいことに挑戦することのできる喜びを実感できた。「体がだるいから嫌だ」「金にならないからやらない」などを理由に、仲間から頼まれたことを拒否することはなかった。急な病院送迎や NA 会場に車でぶっ飛んで行くことも、どんなに疲労していても苦ではなかった。こうした自分の側面に目覚めたのも、ダルクにつながったからだだった。素面(しらふ)ゆえに、新しいことに挑戦できる。その素晴らしさを知ったことは、私の回復にとって大きなプラス要因となった。

この「奇跡」のようなクリーンの時間が続くことで、私は過去を冷静に振り返ることができた。それまではクスリかアルコールのために、何を考えても必ず違う方向に行動していた。しかし今では、もう自分が思ったことを何ら疑問の余地なく、ストレートに判断して、まったく違和感なく腑に落ちるように行動に移せた。この喜びは掛け替えのないものに思えた。自分の体力と時間を仲間のために「犠牲」できる喜びを、私は実感していた。それは仲間からの信頼と連帯の証でもあり、もうクスリやアルコールによる「孤独の世界」に身を隠す必要もないことを意味していた。そうして寮長として、金銭管理から仲間と直接関わる役割など、仕事全般に関わるようになるにつれ、やがて私は「自分のダルクを持ちたい」という理想を描き始めるようになっていった。(次号に続く)

佳作

雛祭り祈りを込めて桃の花	コバ	みどりさん心の中は桃の花	なん
香り立つ桃の花にも誘はるる	チャコ	青春を思う毎日桃の花	一郎
桃の花香り仄かや恋心	のん	世の常の酒に溺れて桃の花	アオ
桃の花孫の祝いの初節句	みく	鹿島にはあまり見かけぬ桃の花	ヒロ
晴天や甲斐のつばらに桃の花	しま		

特選句

癒さるる
赤子のほっぺ桃の花

ゆうこ

「銀も金も玉も何せむに優れる宝子にしかめやも」(山上憶良)が万葉集にあります。何時の時代も子や孫は可愛い。赤子のほっぺを見ていると触れたくもなる。眠る姿も笑む姿も癒される。桃の花も明るく微笑ましい句です。

特選句

幼な日の
かんざしにして桃の花

れいこ

人の心は字の様に水に浮く小舟の様でもあり、感情とも言うが、色彩にも心が動く。空の青、草木の緑などには安らぎ、黒や血などにはおののく。畑や堤防などに咲く菜の花をしばし眺めていると、心安らぎ我ながら微笑む。日常のことながら、人間も含め大自然の不思議と摂理を思う句です。

特選句

信濃路の
峰々晴れて桃の花

ヒロ

桃には食用桃と花を見る花桃があり、信濃にはどちらもあ。花桃は国道256線の妻籠、清内路、昼神温泉に一万本が咲く。実桃は飯綱町丹雲郷などあり、戸隠、黒姫、妙高の峰々の残雪とのコントラストも美しい。また千曲市の倉科、森地区の杏の花も桃源郷として名高い。昔尋ねて私にも懐かしい句です。

秀逸句

今月の秀逸句

朝まだき

古河へ遠出の桃祭

オノ

古河市の桃祭は江戸時代初期、土井利勝が藩主の時に江戸で子供に桃の種を拾わせ、古河の農民に送り育てさせたのが始まりという。今は、矢口、源平、寿星、寒白、菊桃の五種千五百本が咲くという。朝早くから出掛けた旅の如実の思いの句です。

愛おしや

君の笑顔も桃の花

アオ

男性には恋人や好きな女性の笑顔は何より嬉しく元氣も湧く。古来から和歌に歌謡に俳句にも詠われたが尽きることはなく、未来永劫恋の歌は続き、その時の当人は胸をときめかせる。この詠も桃の花が明るくて微笑ましい。

山もまた

川も心も桃の花

アベ

桃は中国黄河上流が原産地で、日本へは縄文時代に伝わったとも。昔は薬用や、魔除けに用いたが、江戸時代に改良されて食用にもなった。日本一生産の多い山梨県などは当に山も川も桃の花盛りの桃源郷の思いになる旅の句です。

まぼろしの

太郎もそこに桃の花

くみ

おとぎ話の桃太郎は孝靈天皇の御代に今の岡山県吉備津を平定した、吉備津彦命、稚武彦命の史実を元に室町時代に来たとも。今では漫画やアニメがあるが、昔の人も何かと考えて子供達に話したのかも。桃の花に太郎や我が子思う句です。

合席の

話のはずむ和布和え

ゆたか

合席は居酒屋などで見知らぬ人と同席すること、混んでいる時などにはバスや電車も同じかも。和布和えは和布に蛸など合えた酔いの物。合席で始めは遠慮勝ちだが、同郷や仕事で思はず話が合う、東京などは多くは地方からの人が多いのでこの様な光景もあり懐かしい句です。

駆けつこの

足のもつれや草萌ゆる

ゆたか

三月にもなつて暖かくなると子供達は公園などで元氣に走り回る。親もつられて追いかけるが、子の早やさに足ももつれる。また運動会などでも何かの競技に出るが転ぶのも多い。つくづく齢を思うのもこの時です。少しの哀れも思う句です。

どっこい

私も生きてます～我が回復記～ 「アル中のシゲ」の巻

第10回

「オマエを殺す」「殺す」「殺す」の幻聴は少しも止まらない

重症化したアルコール依存症による後遺症として、いっこうに止まらない幻聴。そして恐怖の悪魔のささやき…。もはや常態化したこの現実から逃れるために私は狂った頭をあちこちの壁にぶつけ続けます。でも、恐怖心は肥大化するばかり。私はさらに酒をあおり、のたうち回ります。しかし、「オマエを殺す」「殺す」「殺す」…の幻聴は少しも止まらない。そのたびに、「これは今まで俺が過去に犯した罪の代償なのか…」と自問自答する。親、弟、友人…いかに周囲の人間たちを酒によって泣かせ、苦しめ、裏切ってきたか…。結局、世の中因果は巡るもので、人を泣かせ、苦しめ、裏切れれば必ず自分に返ってくる、その事にやっと気づかされました。それでも酒は止まることなく継続しているのですから、この病気は本当に厄介で、奥が深いです。

ある朝、いつものように朝からビールをあおり、自宅代わりのホテルからタクシーを拾うために道路に出る。すると車のエンジン音が「お前を殺す、お前を殺す」と聞こえてくる。タクシーに乗り込み、例によって車中で酒をあおる。幻聴は止まらない。常連客のいる寿司屋に到着。いつものメンバーが寿司をつまみ、酒を飲んでいる。私も「いつものを頼む」と注文、すると店長はお酒を私の前に置く。私はすかさず飲み干す。幻聴は止まらない。いつものメンバーは笑顔で飲んでいる。しかし、私の頭の中には、機械が埋め込まれている。幻聴と戦いながら常連客と飲み続けている。夕方まで飲み、クラブへ向かう。幻聴は止まることなくエスカレートする。クラブの席についてホステスが接客してくれる。私がイライラしている状態(幻聴)など、誰も分からない…。

当たり前のお話です。この悪魔のささやきは私にしか聞こえないのですから。この先、幻覚が出てくることなど想像していません。これからが私にとって最悪の経験の始まりです。(次号に続く)

4月のバースデー

パロ



アイラブユー

シゲノリ



僕がシゲノリです。

タカヒロ



一切食っちゃいました。

クロ

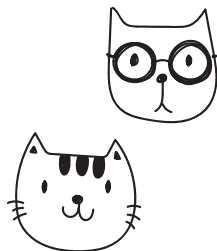


えっ！

サン



潮騒の古い仲間です。



潮騒 Information

前年に続き赤い羽根共同募金の助成決定
デイケア活動拠点にエアコン設置へ

NPO法人・潮騒JTCは今年も赤い羽根共同募金の交付団体に選ばれ、水戸市千波町の社会福祉法人・茨城県共同募金会(県総合福祉会館内)で4月8日、配分決定の伝達式がありました。潮騒にとっては通算4度目の交付決定の栄誉です。

今回の平成30年度共同募金助成金(平成31年度実施事業分)の一般募金には、審査の結果、潮騒を含め計48施設・団体が選ばれました。同募金会側からは「年々募金額が減っている中、皆様からお預かりした大切な募金の助成をきちんと生かせるようにお願いします」との激励の助言を頂きました。

潮騒JTCが今回申請していたのは、薬物・アルコール・ギャンブル依存症者の回復支援活動の拠点となっている、鹿嶋市宮中の潮騒アディクションビレッジ会館3階フロアにエアコンを設置する空調設備工事業の事業です。エアコンの整備工事には約220万円の経費が見込まれ、このうち100万円が同募金会から助成されます(助成率=45.8%)。

この決定により潮騒の入寮者たちは、夏場はもとより通年で快適な環境の下で依存症の回復プログラムに取り組めることになります。栗原センター長は「今回の助成で、念願だった活動拠点にエアコンを設置できます。潮騒では高齢者が増えているだけに日々の体調管理が難しくなっており、室内活動が中心のデイケアの取り組みにとって朗報です。いつもながら赤い羽根共同募金の温かい眼差しと善意の配慮には深く感謝申し上げます」と話していました。



4月の行事

- 4月6日 潮騒大運動会
- 4月8日 東京家族会講話
- 4月12日 潮騒俳句会
- 4月14、20日 秋元病院メッセージ
- 4月16日 ひたちなかエイサー演舞
- 4月23日 潮騒人間塾(午前)
ソフトボール大会(午後、大野第2球場)
- 4月28日 各ナイト大掃除(衣替え)
- 4月29日 ディケア大掃除

5月の行事予定

- 5月5日 エイサー(行方市の天王崎公園)
- 5月8日 水戸保護観察所・スマーブプログラム
- 5月9日 潮騒俳句会
- 5月10日 プロジェクト会議
- 5月12、18日 秋元病院メッセージ
- 5月26日 潮騒家族会

献金・献品を頂いた方(4月15日現在)

- ・小原 郷子 様 ・小川 宏治 様
- ・匿名様 多数

今月も献金・献品をいただきました。心から感謝申し上げます。本当にありがとうございました。おかげさまで潮騒 JTC は、回復のためのプログラムを実践することができておりますことをご報告いたします。今後ともご支援くださいますよう、なにとぞ宜しくお願い申し上げます。

※その他匿名の皆様からも献品・献金をいただきました。ありがとうございました。

※発送作業簡略化のため、振込取扱票は全員の方に同封させていただきます。どうぞご理解のほどをお願いします。

編集後記という名の独り言

やはり今回は「ピエール瀧薬物事件」に触れたい。彼は俳優、声優、タレント、そしてミュージシャンとマルチな活躍の絶頂期にある有名人ということで、ワイドショーや週刊誌、ネットなどで今も扇情報道が続く。メディアには格好の飯の種だけに、初公判にはまた、あの騒動を再燃させるのだろう。逮捕当初、彼は裁判も受けていないのに法を破った極悪人よろしく、例によって人権無視の報道一色に染まった。彼を丸裸にして袋叩きに、家族をも巻き込んで世間のさらし者にするバッシング報道の“異常さ”はエスカレートするばかり。報道によれば、彼は結婚などでやめていた時期があったとはいえ、20歳代から薬物(主にコカイン)を使用していたというから、薬物依存症者そのものではないか。厄介で困難なこの病気に、法治国家だからとはいえ紋切型の罰を与えるだけでは何ら問題は解決しない。恐らく本人も「やめたいのにやめられない」と苦しんでいたはずだ。その意味で、今回の事件化は、彼を治療・回復の場に繋げるチャンスとなる。センセーショナルに扱うのがこれらメディアの常道かもしれないが、薬物の単純自己使用という「罪」を犯しただけで、どうしてメディアは彼の人生と生活を根こそぎ奪い取るのか? 彼は「逮捕」というだけで私たちには想像を絶する社会的な制裁を受けており、今後は関係した映像作品やCMの自主規制などで莫大な違約金や損害賠償を請求されるという。でも、薬物の単純自己使用事件の被害者は自分自身であり、被害と加害が同在する奇妙な構造の刑事犯罪といえる。依存症は究極の自傷行為であり、社会倫理や道徳では解けない人間の複雑な在り方や、魂の根源に関わる難しい問題。報道では「罪の償いは当然だとしても早く治療の場につなげるべき」とする専門家の助言や、既に欧米が舵を切っている「薬物の非犯罪化」や「ハームリダクション」(身体ダメージの軽減)などのコメントもあったと聞く。また関連作品の撤去に関して、影響力のある音楽家や映画監督からは「音楽や作品に罪はない」との声も上がったようだ。これらは「罪を憎んで人を憎まず」「病を憎んで人を憎まず」「失敗してもやり直せる社会の実現を!」につなげる救いと希望の言葉だと思う。その意味で今回は、社会防衛を盾にした「排斥と追放で事足り!」とする従来の流れから、やや潮目が変わってきたようにも思う。そうした主張はまだまだ少数派だが、当事者支援の立場から僕は今後もしつこく、薬物扇情報道に「意義あり!」の声を上げていきたい。(市)

潮騒通信 どっこい生きてます! 2019年4月

Contents

- P② 世代を超えた潮騒流「学びへの挑戦」を定着させたい
- P③ 東京家族会総会に栗原センター長らが出席
- P④ 潮騒大運動会
 - P⑤-⑦ 仲間の感想文
- P⑧ 古道を歩き歴史と自然の恵みを肌で感じる
鹿嶋神の道
- P⑨ 孤立を防ぐ仲間との絆を得て4度目の高校生活に挑戦
栗原センター長の背中に教えられ奮起する一郎さん
- P⑩ しおさい Q&A 講座「12ステップ理解へのアプローチ」
第4回 依存症と脳のメカニズム
- P⑪ 受刑者からの手紙
- P⑫ しおさい俳優 4月のお題「ひな祭り」
- P⑭ どっこい私も生きてます「アル中のシゲ回復記」/ 4月のバースデイ
- P⑮ 行事予定 / 編集後記 / 献金・献品 / 目次

■ 編集・発行:

特定非営利活動法人
潮騒ジョブトレーニングセンター(本部)
〒314-8799 鹿嶋郵便局 私書箱 34号
〒314-0006 茨城県鹿嶋市宮津台 210-10
TEL:0299-77-9099 FAX:0299-77-9091

潮騒アディクションビレッジ会館
(潮騒アディクション・ケアセンター)
〒314-0031 茨城県鹿嶋市宮中 4-4-5
TEL:0299-95-9991 FAX:0299-95-9992

Eメール k.s-darc@orange.plala.or.jp

ホームページ <http://shiosaidarc.com/>



